

秋田県由利地方の砂丘荒廃地における西目浜集落の歴史

—とくに製塩に焦点をあてて—

真坂一彦^{1*}・池田正治²**History of Nishime coastal villages at the devastated dune in Yuri District, Akita Prefecture, with special reference to the salt manufacture.**Kazuhiko Masaka^{1*} and Masaharu Ikeda²

Abstract: History of Nishime coastal villages at the devastated dune was reconsidered with special reference to the salt manufacture. According to ‘History of Nishime Town,’ the coastal forest degraded just after the Meiji Revolution at mid-19th century. However, the travel writer Nankei TACHIBANA and the geographer Tadataka INO documented the vast sand beach in this region in 1785 and 1802, respectively. Indeed, Tsukiyama Shrine stood on the denuded small hill surrounded by devastated dune at the time. Besides, peoples in the coastal villages engaged in the salt manufacture at the end of 16th century at the latest. These ancient documents imply that the devastated dune already developed far before Meiji Revolution. In late Edo period, black pines were planted to prevent the sand drift for private reclamation works of swamp, Nishime-Kata. The stands seemed to decline soon, and sand drift occurred. Afforestation began again at early 20th century by the public work of Nishime Village. Salt manufacture revived during and after the Pacific War, but people depended on the driftwood for fuel, not on the living trees in the coastal forest.

1 はじめに

冬季の季節風が吹き付ける日本の海浜地域には、太平洋戦争後しばらくまで海岸砂丘が発達していたところが多かった。飛砂が荒ぶ広大な砂地に生活する人々の様子や旅する困難さは、古くは江戸時代に活躍した古川古松軒や橘南谿、吉田松陰らの紀行文、日記にも特筆されている。冬季に発生する大量の飛砂は、砂丘後背の村落や田畑を埋め、ときに川を埋めて一帯に洪水を引き起こすこともあった(尾留川, 1981; 須藤, 2008; 真坂・三上, 2017; 宮崎, 2013)。現在では、鳥取砂丘などいくつかの例を除き、ほとんどの砂丘が飛砂防備のために植栽されたクロマツ林によって覆われ、生活を脅かすほどの飛砂害が発生することはほぼなくなった。ただし、このような歴史を扱った県史、あるいは市町村史などの郷土史では、飛砂害そのものよりも、海岸林造成前にみられた砂丘荒廃地の様子の紹介や、造林面積、経費に関する統計に主眼を置いた記述が多く、周辺住民の生活の様子に触れている郷土史はほとんどない。飛砂害を知る世代は、戦後に集中的にクロマツ林が造成される以前に生まれた人々であり、そのため、飛砂が発生していた時代の生活を知る世代の記憶が継承されずに失われていく事態にもなっている(e.g., 真坂・三上, 2017)。

本研究では、太平洋戦争後の浜集落における生活

環境についての非文字情報(記憶など)を記録することを最終目的に、日本海北部にあって、飛砂害が著しかったといわれる由利海岸における西目地域の浜集落を対象に、砂丘荒廃地が広がっていた時代の生活環境にかかわる歴史の考証を行った。一般に飛砂害の発生の原因については、明治維新後の林政の弛緩や、太平洋戦争の前後における海岸林の濫伐と手入れ不足が上げられることが多く、その背景に、製塩や日常生活の燃料として伐採されたと説明されている(廣山, 2016; 小田, 2003; 鈴木, 1971)。由利海岸でも江戸時代以前から製塩が行われ(本荘市, 2003; 村上, 1999)、一旦途絶えた後、太平洋戦争後の食糧難時に製塩が復活した(象潟町, 2001; 本荘市, 2003)。そのため本研究では製塩に焦点を当て、西目及び周辺地域の郷土史と、この地域を通った江戸時代の旅行家らの紀行文などから往時の海浜環境の復元を試みる。さらに、太平洋戦争前後生まれの地元住民を対象に、当時の生活の様子や飛砂害の状況に加え、海岸のクロマツ林を伐ったのか、製塩が行われていたのか、その際の燃料はどのように調達したのかの4点に焦点を当てて聞き取りを行った。本研究では郷土史だけでなく古史料にも当たるため、本文中では特に断らない限り『』付きで資料名を表示した。また、古史料では現在の地名と異なったり、地名に誤記が多いため、適宜、()付きで現在の地名を記した。故人については敬称を省略した。

2 調査地と調査方法

調査を行った秋田県由利本荘市西目町の海浜には、古くから浜集落が存在していた。現代の集落名では

¹ 岩手大学農学部, Faculty of Agriculture, Iwate University, Morioka, Iwate 020-8550, Japan

² 秋田県由利本荘市西目町西目御前ヶ沢 16-1, Nishime, Yuri-Honjou, Akita 018-0603, Japan.

*Corresponding author: masaka@iwate-u.ac.jp

北から順に、海士剝(あまはぎ), 中高屋(なかこうや), 上高屋(かみこうや), 出戸(でと)と呼ぶ。図-1に、調査対象とした集落および周辺の地図を記す。このうち、中高屋と上高屋は典型的な塊村であり、砂浜に突出したようなかたちで集落が形成されている。一般に、高屋とは、荒屋や田屋と同様に位置や状況から付けられた家屋地名(加藤, 1997)であり、中高屋と上高屋という集落名は砂浜に海に向かって突き出た高台に由来すると考えられる。表-1に、本論文で扱う歴史的事象を記す。

聞き取りを行ったのは、海士剝から佐々木与三氏(1934[昭和9]年生), 中高屋から釜台敏勝氏(1953[昭和28]年生), 上高屋から渡辺春雄氏(1939[昭和14]年生), および出戸(出戸後)から池田鐵二氏(1930[昭和5]年生)の各集落から一人ずつの4名である。調査は、池田氏は2015年4月1日に、他の3名は同3日に実施した。本研究の主旨と必ずしも合わない証言もあるが、歴史的記憶は記録する価値があるため、そのまま記載することにした。

3 明治時代以前の浜集落小史

中世以前の当地の出来事は口碑として残るものが多い。『西目村の話』(佐々木, 1932)によると、元明天皇(661[齐明天皇7]~721[養老5]年)の時代、飽海の柵^{註1}から出戸に移住があったらしい。850(嘉祥3)年の出羽地震では、海士剝一帯が陥没して柏台村が海の中に沈み(高屋の沖), このとき生き残った人々は内陸の地に移住した。著者は、柏台村民が一向宗門徒であることに加え、13世紀に加賀から宗教迫害を逃れてこの地にやってきた人々がいたという口碑、そして海士剝の習俗も併せて、この地域の加賀とのつながりの強さを指摘している。なお、出羽地震について近隣の象潟では、1934(昭和9)年に天然記念物指定の際の説明で、「嘉祥年間土地陥没ノタメ海水ノ浸ス所トナリ(中略)松島ノ景ニ髣髴シ八十八島九

十九潟トシテ其ノ名世ニ喧傳セラレタリ」とある(文化庁文化遺産データベース, <http://bunka.nii.ac.jp/db/>; 2018年12月21日確認)。海士剝集落から300mほど北にある御月森には、1456(康正2)年に加賀より月山神社が遷宮された。『羽後國由利郡村誌』(秋田県, 1880)(以降、『由利郡村誌』)における当社の説明として「海浜砂場中ニ突起セル小丘童禿ニシテ硝石処々ニ散在ス」とある。童禿とは禿山を意味し、御月森は江線から約500m内陸に位置する(図-1)。月山神社は1804(文化元)年旧暦3月3日に現在の場所に遷宮再建されたため^{註2}, 神社が海浜砂場中にあったのは19世紀初頭よりも前の時代ということになる。この地域は、1914(大正3)年発行の5万分の1地形図「本荘」でも荒地として表されている(図-1)。また同村誌には、海士剝の説明として「北ハ平砂渺々」とある。

この地域における製塩業については、『西目町史 資料編』(西目町史編集委員会, 2001a)に掲載されている『浜山及塩焼資料』に、「当村ニ於テハ天正以来文

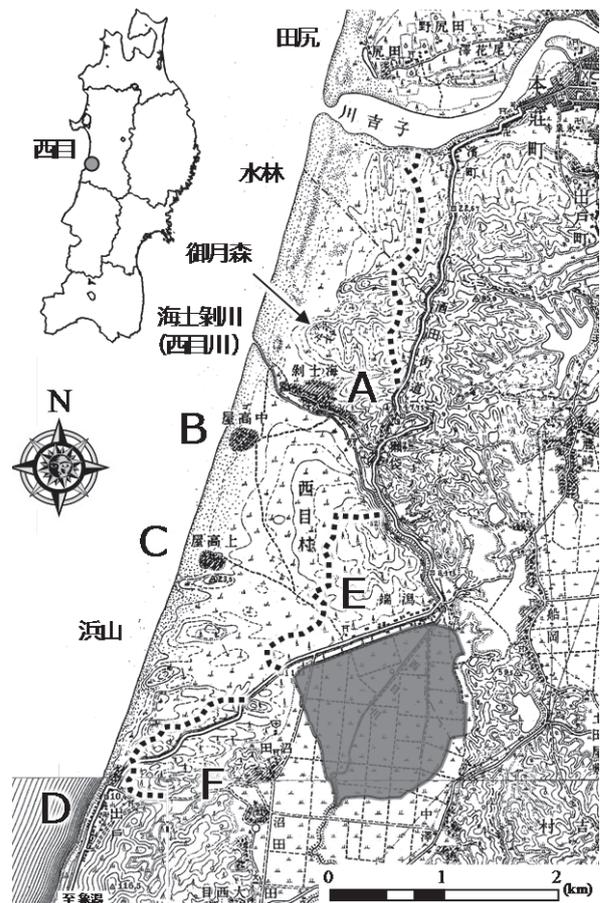


図-1. 西目浜集落の位置関係。

大日本帝國陸地測量部による5万分の1地形図「本荘」, 「象潟」, 「矢嶋」(大正3年発行)より作成。A, 海士剝; B, 中高屋; C, 上高屋; D, 出戸; E, 潟端; F, 沼田。浜山はC, D, Eに囲まれた地域を指す。点線は荒地の境界, 潟端南方の灰色面は西目潟跡地の標高10mの等値線で囲われた部分。

表-1. 西目浜集落に関連した近代までの年表。

西暦(元号)	出来事
661~721(齐明天皇7~養老5)?	由理柵から出戸へ移住?
850(嘉祥3)	出羽地震(M7程度). 柏台村が海没.
13世紀頃?	加賀より一向宗門徒が避難?
1456(康正2)	月山神社が海士剝の御月森に遷宮.
1647(正保4)	江戸幕府による正保国絵図の作成.
1698(元禄11)	出羽國由理郡之内村高帳の作成.
1784(天明4)	菅江眞澄が羽州浜街道を通る.
1790(寛政2)	高山彦九郎が羽州浜街道を通る.
1802(享和2)	伊能忠敬が沿岸測量でこの地を通る.
1804(文化元)	月山神社が現在地に遷宮. 象潟地震(M7.3).
1828~35(文政11~天保6)	佐藤重左衛門らが西目潟干拓を行う.
1852(嘉永4)	吉田松陰が羽州浜街道を通る.
1911~23(明治44~大正12)	西目村が村有地(浜山)に砂防造林を行う.

備考: 羽州浜街道とは出羽國の沿岸部を南北に連絡する街道。

化迄、出戸及沼田地方ニ於テ製塩事業ヲ営ミ居候」と説明されている(p.500)。天正時代は1573~93年にあたるため、この地では江戸時代以前から200年以上にわたって製塩が行われていたことが分かる。『新屋町郷土史』(辻永, 1942)によると、由利地方の北にある下浜から新屋浜には、元亀天正の頃(1570~93)に織田信長に圧迫された一向宗門徒の加賀衆が逃れてきて新しい製塩技術をもたらした。横のつながりが強い同郷同門であるがゆえに、海士剝もその影響を受けていたことは十分に推察される。

1647(正保4)年に江戸幕府の命によって製作された『正保国絵図 出羽一國御絵図』(秋田県公文書館デジタルアーカイブ; <https://da.apl.pref.akita.jp/>; 2018年12月21日確認)には、中高屋は高野塩屋と記されており、この時代、この集落は製塩が生業だったことが推察される(cf. 村上, 1990)。加えて、『秋田県史 近世編』(秋田県, 1963)に掲載されている1698(元禄11)年作成の『出羽國由利郡之内村高帳』には、海士剝村、花村(上高屋)、高谷村(中高屋)の石高だけが「高無シ」と記され(p.603)、西目の浜集落が製塩業に特化していた可能性がある。1784(天明4)年旧暦9月30日、日本民俗学の先駆けとも評される菅江眞澄が記した『鰯田濃假寝』には、海士剝を夕刻に通った際に塩焚きを題材にした次の句を一首詠んでおり、18世紀後期における海士剝での製塩が窺える。

もしほやく海士のとまやの夕けふりをたつをしるへに宿やなからん

ところが寛政の三奇人の一人と称される高山彦九郎は、1790(寛政2)年に残した『北行日記』に、象潟から出戸のあいだを「此邊鹽濱也」と表し、本荘の北をふたたび「鹽濱漁獵の所」と記しているにもかかわらず、出戸以北の浜集落については「小屋(中高屋)といへるところを過ぎ甘崎川(海士剝川^{註3})を渡る」と触れているだけである。周辺と比べて製塩は盛況ではなかったようだが、1804(文化元)年の象潟地震では、出戸、上高屋を含む地域で塩釜小屋9棟が潰れたと報告がある(『西目町史 資料編』)。『西目村の話』によると、この地での製塩業は、内陸にあった西目潟において新田開墾が始まった19世紀初頭の文政年間^{註4}に人手不足によって自然廃業したという。その後、製塩業は1898(明治31)年に中高屋で再興されたが4~5年ほどで終わった。

海浜の様子は、眞澄が歩いたのとほぼ同じ時期の1785(天明5)年旧暦3月下旬、紀行作家の橋南谿が冬季の砂嵐に巻かれつつ歩き、「越後出羽の二ヶ国は、街道、北海にほとりして、百六十七里が間は、一日も沙原を通らざることなし」と『東遊記』に記している。そして1802(享和2)年旧暦9月9日、沿海測量のためにこの地域を訪れた伊能忠敬は、『測量日記』に、本庄(本荘)町外より尼剝(海士剝)村まで砂原だったと記している。上小屋(上高屋)から本村の出戸まで

は「海士手山際八・九十間」とあり、これは汀線と海浜砂丘、あるいは海岸段丘の麓のあいだの距離を指していると考えられ、当時の砂浜は150m前後の幅があったと推察される。その50年後の1852(嘉永4)年旧暦2月23日、長州藩を脱藩して東北地方を遊歴していた吉田松陰はこの地を通り、「行海濱平砂」と『東北遊日記』に記している。最上川以北の松陰の日記には、このような記述がくどいほど繰り返され、秋田藩久保田城下に入った24日の日記の末尾では「新潟至は大抵海濱平沙漫々浩々行歩頗困」と締めくくっている。明治初期における西目の浜街道の様子は、「砂場ニシテ道巾限界ナシ」と『由利郡村誌』にある。浜街道の様子は19世紀末でも変わらず、『本荘町志』(本荘市, 1897)には「秋田へハ程九里海岸ノ軟沙ハ足ヲ没シ三步ニシテ壺歩ハ退クノ想アリ酒田へハ程十八里沙漠アリ礫地アリ」と説明されている。

西目潟については、『西目町史 通史編』(西目町史編集委員会, 2001b)に掲載されている『佐藤家系統并功略伝記』に、「飛砂のため海士剝に通じる細流が埋没し、年々梅雨時に湖水が溢れ、周辺の耕地百五十町歩余りに損害を与えた」(p.260)とある。細流とは海士剝川のことである(図-1)。この河口より2kmほど北にある子吉川の河口も明治初頭は周辺に砂丘が広がり、「西北風烈シキヲ以テ怒濤海沙ヲ捲キ又沙漠ヲ簸揚シテ港口ヲ埋メ出入船舶ニ便ナラス」という環境だった(『由利郡村誌』)。海浜の砂防植栽は浜山において西目潟の干拓と併せて行われた。この干拓事業は1828(文政11)年から、潟保の豪家佐藤重左衛門が本荘藩士淵名孫三郎とともに藩の許可を得て、城下古雪の廻船問屋鈴木七郎右衛門から援助を受けて行ったものである(『西目村の話』)。干拓が終わる1835(天保6)年まで松15万本、ネム30万本が植栽された。植栽にあたっては、藩主が潟の西北部に松を植林することで地元民を誘導した形跡がある。『由利郡村誌』によると、明治初頭の出戸の民有林には、集落の東北方向10町に浜山林として面積14町余(東西2町50間、南北4町10間)の松林があり、また同方向3町には下山林として、面積13町余(東西4町10間、南北2町45間)のカシワが多い松林があるという。いずれも立木の周囲長は1尺以下とあるため、幹の直径が10cm未満の若齢林であろう。

『西目町史 通史編』には、「明治維新後、海岸砂防林の荒廃が進み」とある(p.352)。『広報にしめ』の1997(平成9)年6月号に掲載された連載記事『町史だより』には、当時、「西目駅前国道や役場前の水田も埋まる事態になり」と説明されている^{註5}。さらに「この土地は、明治四十四年部落有林統一により西目村の所有となり、砂防林の再生は村の責任となった」。そのため、砂防林造成を営林局に陳情したものの聞き入れられず(畠山, 1998)、1911(明治44)年より村独自で砂防造林を行うこととなり、その責任者

に佐々木孝一郎助役が指名された(後の町長, 指名当時は23歳). 事業は古今東西の例に違わず地元住民の理解がなかなか得られず, たとえば砂の移動を抑えるために植える萱株の収集に, 成果の確信を持ってない村民は協力しようとせず(西目村役場, 1957), また現場監督を厭う吏員が, アリバイ的にわずかな苗木を植えさせて, 残りの大半の苗木を砂に埋めてしまうサボタージュもあった(『西目町史 資料編』, p.521-524). それでも助役の熱意は徐々に村民へ伝わり, とくに飛砂害が著しかった出戸, 沼田両部落の村民が協力を始め, 当初想定していた15年計画より3年も早く1923(大正12)年に成林をみた. なお, 当時の西目村内の国有林を管轄していたのは本荘小林区署(現本荘営林署)だった. 当林区署は水林・浜山・田尻の三団地を対象とし, 「明治三十三年以降たゆみなく連年砂防植栽に努め」と『秋田県史 第六巻』(秋田県, 1965b)にある(p.569).

4 聞き取り調査

4.1 海士剝

海士剝の住民の多くは漁師で, 佐々木与三氏も15歳の頃から北海道の紋別を皮切りに, マーシャル諸島, 樺太, 小樽, 稚内に渡った.

海士剝では塩は各戸がつくり, 余剰分は物々交換に供した. 塩焚き用の燃料は浜に流れ着いた流木を使い, クロマツ林の木々を伐ったと記憶はない. 海岸林のなかはきれいに掃かれ, 集められた落葉落枝は売ったり自家の燃料にしたりした. 林内にはショウロもよく出た. 飛砂の記憶はなく, クネシバという, おもに竹製の防風柵で家々を囲っていた. 海士剝の前浜は広く, 子供のころ夏の砂浜は熱いため板を持って歩いて海水浴に行った. そして途中, 板の上で小休止した. 太平洋戦争後, 前浜にはソ連製の機雷が漂着することがあった. 機雷は持ち運びできるほど小さく, 岩などに投げつけたら爆発した. 12~15歳の頃, 夜に蟹を採りに行くと浜には背広姿で焚火をしている者がいた. 外国語を喋り, 皆が「背広奴」と呼んだ. 砂浜は最近, 縮小気味で昭和30~40年代からみると半分くらいになったという実感を持っている.

4.2 中高屋

この集落在住の釜台敏勝氏の家に伝わる口碑によると, 先祖が塩焚きのためにつくった竈が良く出来たものだったことを殿様から誉められ, 釜台という姓を賜ったとのことだった. ただし釜台氏に塩焚きを見た記憶はないため, 太平洋戦争後, 製塩は生業, あるいは副業としては行われてはいなかった可能性がある. 住民のほとんどは漁業を生業とし, 戦後すぐは北海道に出稼ぎに行った.

30年ほど前までは, 海風を除けるため土地を10m

ほどすり鉢状に掘り下げ, そのなかに家を建てていた^{注6}. ただし, 経済的余裕のある8軒に限ってのことだったらしい. 釜台氏によると, もともとの地面に立つとそれらの家屋は屋根しか見えなかった. すり鉢の底は水捌けが悪く, その中の一軒は雨が降ると床下浸水した. 現在ではそのような住居はみられない. 日常の煮炊きや暖房に使う燃料はクロマツ林から採取したものではなく, 寄り木(流木)を用いた.

4.3 上高屋

渡辺春雄氏によると, 上高屋はママと呼ばれる高さ数メートルの防風用の石垣と盛土によって集落が囲われている(写真-1)^{注6}. ママの語源は不明だが, 渡辺氏は塊という漢字を当てると推察している. このママによって集落内に飛砂が吹き込むことはなかった. 石垣に用いた石は浜に打ち上げられた丸石で, 地元ではダマ石と呼んでいる(写真-2). このママについては, これまで考古学的な研究対象とはならなかったようで, いつの時代に構築されたのかはまったく不明である. しかし付近に土花貝塚があることから, 太古から人が住んでいたことは確かである.



写真-1. 民家裏のママを越す歩道. 階段を上って盛土の上に出る.



写真-2. ママの基部に積まれたダマ石.

集落の南に隣接して坊主森と呼ばれる標高 24.3m の砂山があり(現地では「ぼさまやま[坊様山]」と呼ぶ)、渡辺氏が子供の頃、冬に馬櫃で砂留柵まで滑って遊んだ。この坊主森は現在ではクロマツ林に覆われている。渡辺氏が母から聞いた話では、彼女は砂防林植栽に携わったそうで、クロマツを植える前は中高屋より2kmほど内陸の湯端というところから海が見えたという。

上高屋では戦時中、前浜で塩田や塩焚きを行ったが、渡辺氏によると終戦後は記憶にない。前浜は広く、渡辺氏が子供の頃は学校の運動会を開催できたほどだった。また、夏の熱い砂浜を海まで行くのにハマゴウを伝って歩いた。ブナという草で蓆を織ったというが、この植物はハマニンニクと推察される(cf. 齋藤, 1995)。上高屋は地引網による漁業を生業とし、舟を揚げる場所に番地が付いていて舟主は賃借料を払っていたが、現在では海岸侵食によって舟揚場も運動会をした砂浜も海に没した。

4.4 出戸(出戸後)

この集落在住の池田鐵二氏によると、出戸では家の周囲をカヤや雑木で年中潮風除けしていたが、家のなかや畑に砂が入り込んだ。ただし、積もるほどではなく箒で軽く掃く程度だった。太平洋戦争後、出戸の全戸数は100戸ほどで、そのうち漁師は20戸ほどだった。砂丘地であるため水田はなく葉物野菜の栽培が難しかったため、ネギ栽培が普及したほか、サツマイモやスイカをつくった。浜山と呼ばれる、出戸と上高屋のあいだの浜で戦時中から昭和30年頃まで塩田が営まれた。昔は、塩焚きだけでなく日常の煮炊きも賄えるほど流木に不自由せず、つくった塩は米と物々交換をした。また冬の閑散期の副業として、イグサを岡山から取り寄せ、畳表用のイグサ織りをしていた(幅2尺5寸)。

前浜は磯場で海藻が多かったが、昭和20年頃に磯場が消失して砂浜になった。砂浜は広く、学校の運動会も行えるほどだった。集落の後背に小山が二つ並び、そのあいだが谷となっているため海から内陸に向かって谷風が吹き抜ける。戦後はおそらくその谷風のためにソ連製の機雷(大きさ1.5mほど)が浜に吹き寄せられ、なかには爆発して護岸を破壊したこともあった。

5 考察

『西目町史 通史編』では、海浜の荒廃と飛砂の発生を明治維新後の林政の混乱にともなう濫伐に原因を求めている。ただし小史で紹介したように、この地では江戸時代以前から製塩が営まれ、また海士剝の周辺は、19世紀以前にすでに汀線から500m以上の内陸部まで砂丘荒廃地で、出戸まで広大な砂地が広がっていたことが各種の古資料から推察できた。

須藤(2008)は、1873(明治6)年に庄内の酒田野付家によって記された『御用留』のなかに、「正保二年西西浜通村々塩焚竈これ有り候為浜山諸木伐尽し不毛の地に罷成り、年中四季共に風吹く度に飛砂強く吹立て(後略)」という記述を紹介している(正保二年は1645年のこと)。今回、『御用留』と近い時代に作成された『正保国絵図』や『出羽國由理郡之内村高帳』からは、17世紀の西目の浜集落が製塩を生業にしていたことが推察された。そして『秋田県史 第三巻』(秋田県, 1965a)には、藩政時代における秋田の製塩は「いつも薪に不自由し、その確保に苦心している」とある(p.286)。これらの史料から、庄内と同様に西目においてもこの頃に燃料とする草木が海浜で枯渇した可能性を指摘できる。砂丘地が荒廃することで、飛砂により西目潟から海に流出する海士剝川が埋まり、梅雨時に西目潟が溢れるようになったのだろう。

西目における海岸林造成は、藩政時代以前では、佐藤重左衛門らによって西目潟干拓に併せて実施されたものが唯一の記録である。出資者の鈴木は干拓事業で破産しており、造成後に広大な海岸林の手入れが十分になされたとは考え難い。今の時代のような防風柵や砂除柵が設置されたわけではないため、砂が林内に吹き込んだことは容易に想像できる。「明治維新後、海岸砂防林の荒廃が進み」とは、佐藤らの造林地の遺構以外に考えられない。

砂丘地の荒廃については、太平洋戦争前後の濫伐が原因となる場合がある(小田, 2003; 鈴木, 1971)。たとえば終戦後、秋田営林局経営部長(当時)だった富樫兼治朗は由利海岸の荒廃について、「戦前後を通じた食糧増産のため既存の海岸砂防林が開拓されたが、この伐りすぎで風が砂を動かして砂丘は移動拡大し(後略)」と指摘している(秋田魁新報1950年4月17日付)。しかし今回、由利海岸南部の浜集落に居住する高齢者らへの聞き取り調査により、日常使う燃料は浜に打ち上げられた流木で十分間に合い、クロマツ林を利用するにしても落葉落枝を集めるだけで、さらに余剰分は売っていたという証言を得た。製塩を行うにしても、西目の浜集落では、やはり流木で間に合ったという。一般に、日本の日本海沿岸域は海洋漂流物が漂着しやすい条件にあり(平間, 2014; 磯村, 1980)、現在でも多量の流木が浜に打ちあがる。戦後にソ連製の機雷が由利海岸に漂着したという証言も、そのような自然条件によるものと考えられる。

戦前後に各地でみられた製塩は、国内塩生産の不振に対処するため、国策として自給製塩制度が敷かれたことに起因する(後藤, 2001)。戦前後における製塩について『西目町史 通史編・資料編』には記載がないが、『本荘市の歴史』(本荘市, 2003)によると、本荘北部の松ヶ崎において、戦後、小屋にしまっていた釜を持ち出して海水を煮込んで塩を作った

(p.130-131). また『象潟町史』(象潟町, 2001)には、終戦翌年の春頃から海岸で塩焚きが行われるようになったとある。塩焚きは村中総出で行われ、遠く、山形や新庄から塩を買い求めに来たという。最盛期は1948(昭和23)年頃までで、あちこちのバラック建ての製塩小屋から煙が立ち上った。しかし国の復興とともに食塩の配給が始まり、高価な薪を焚いての製塩は採算がとれなくなったため、1950(昭和25)年頃までに影を潜めた(p.251-252)。このような経緯は、象潟と本荘のあいだに位置する西目でも同様であろう。『象潟町史』には燃料をどこからどの程度を調達したのか記載がないが、少なくとも燃料調達によって象潟の海岸林が荒廃したという記述も口碑もない。出戸以外の西目の浜集落の人々は漁業に従事する人が多かったが、副業や出稼ぎにより製塩に大きく依存することがなかったことも、燃料が流木で十分間に合う背景になったのかもしれない。戦後の飛砂も、出戸在住の池田氏から、家や畑に吹き込んだが積もるほどではなかったという証言を得ている。中高屋や上高屋も、地形を利用した風除け対策がなされており、しかも高台にあることから飛砂害を被らなかつたようである。

以上から、西目の浜集落がある由利海岸では明治維新より半世紀以上前にすでに砂丘荒廃地が広がっていたと考えられる。その原因として、17世紀頃より続いた製塩による燃料採取が有力な候補として指摘できる。明治維新後の荒廃とは、幕末に行われた西目潟干拓事業にともなう砂防造林の遺構と推定され、明治維新後に荒廃が拡大した記録は見られなかった。また太平洋戦争前後に復活した製塩では、燃料を流木に依存するだけで間に合ったことから、戦争にともなう濫伐はほとんどなかったと考えられる。

謝辞

本研究は一般社団法人三菱財団の研究助成によって行われた。伊能忠敬記念館には『測量日記』の複写資料を頂いた。取材では佐々木与三氏、釜台敏勝氏、渡辺春雄氏、池田鐵二氏の皆様から貴重なお話しを伺った。月山神社の齋藤哲則宮司には神社の由来についてお聞かせ頂いた。ここに名前を記して深謝いたします。

注1：出羽国飽海郡由理郷(現由利本荘市)にあった由理柵(ゆりのき)。当時の飽海は、現在の酒田市・遊佐町から由利本荘市・にかほ市の範囲(熊谷, 2014)。

注2：『由利郡村誌』の説明は、地理的位置からも再建以前のことである。遷宮の理由は「同社海風ノタメ屢傾覆スルヲ以テ文政度今ノ地ニ移ス」(筆者注：文化の誤記)とある。ところが宮司に遷宮の理由を訊くと、神事の湯立に使用していた海辺近くの井戸が海中に没したためとの口碑があるという。また同年旧暦6月4日に発生した象潟地震では、烈震に見舞われた本荘～酒田のあいだで死者400人、家屋倒壊5500戸という甚大な被害を出し、地形も変動した。西目でも227戸中45軒の家屋が倒壊し、5人の死亡を出してい

る(今村, 1921)。神社の再建と象潟地震は、日付の前後関係をみるかぎり関連がないと言わざるを得ないが、前震や鳥海山噴火など、考証の余地がある。

注3：現在の西目川。

注4：原本では文化年間と誤表記。

注5：広報発行当時の地理的位置で説明している。

注6：秋田大学の文化地理・集落地誌を対象とする研究室に問い合わせたが、不明とのことだった。

引用文献

- [1] 秋田県(1880):羽後國由利郡村誌。(みしま書房, 1976)
- [2] 秋田県(1963):秋田県史 資料 近世編 下。
- [3] 秋田県(1965a):秋田県史 第三卷 近世編 下。
- [4] 秋田県(1965b):秋田県史 第六卷 大正昭和編。
- [5] 尾留川正平(1981):砂丘の開拓と土地利用。二宮書店。
- [6] 千葉県農地農林部編(1958):平砂浦砂防史。
- [7] 後藤富士雄(2001):酒田の一日—自給製塩の跡をたずねて—。そるえんす, 49, pp.28-34。
- [8] 畠山義郎(1998):松に聞け—海岸砂防林の話—。日本経済評論社。
- [9] 平間洋一(2014):海上自衛隊ゴミ拾い物語。J Ships 2014年12月号, pp.88-89。
- [10] 廣山堯道(2016):塩の日本史。雄山閣。
- [11] 本荘市(1897):本荘町志。(本荘市史編纂資料 第11集, 本荘市史編さん室, 1979)
- [12] 本荘市(2003):本荘の歴史 普及版。精興社。
- [13] 今村明恒(1921):奥羽西部ノ地震帯。震災豫防調査會報告第95號。
- [14] 磯村朝次郎(1980):秋田沿岸における日本海的人文要素について—新しい秋田の地域研究のために—。秋田博研報, 5, pp.1-43。
- [15] 加藤民夫(1997):中世秋田地方に関する空間的分析—展示空間構成のための一試論—。秋田県立博物館研究報告第22, pp.13-30。
- [16] 象潟町(2001):象潟町史 通史編。
- [17] 熊谷公男(2014):出羽国飽海郡と蛸形駅家の成立をめぐって。東北学院大学論集 歴史と文化, 52, pp.1-23。
- [18] 真坂一彦・三上千代蔵(2017):北海道江差町の厚沢部川河口域における飛砂害史。日林誌, 99, pp.61-69。
- [19] 宮崎一彦 編(2013):秋田の海岸砂防林。秋田県農林水産部森林整備課・森林技術センター。
- [20] 村上正祥(1990):塩と地名。そるえんす, 6, pp.2-12。
- [21] 村上正祥(1999):幻の製塩地, 象潟。そるえんす, 42, pp.13-15。
- [22] 西目町史編集委員会(2001a):西目町史 資料編。
- [23] 西目町史編集委員会(2001b):西目町史 通史編。
- [24] 西目村役場(1957):佐々木孝一郎翁を語る。
- [25] 小田隆則(2003):海岸林をつくった人々。北斗出版。
- [26] 齋藤玲子(1995):北太平洋沿岸地域における植物性繊維製品についての考察—編物を中心とする物質文化研究—。道立北方民族博研究紀要, 4, pp.113-134。
- [27] 佐々木孝一郎(1932):西目村の話。西目村役場。
- [28] 菅江眞澄(1784):鱒田濃假寝。(菅江眞澄集第四。内田武志・宮本常一 編集, 未來社, 1973)
- [29] 鈴木重孝(1971):海岸砂地造林事業五十年の歩み。砂防林を愛する会。
- [30] 高山彦九郎(1790):北行日記。(日本庶民生活史料集成 第三卷, 三一書房, 1969)
- [31] 橘 南谿(1795):東遊記。(東西遊記1。宗政五十緒 校注, 平凡社, 1974)
- [32] 辻永佐藤治 編(1942):新屋町郷土史。秋田市役所新屋出張所。
- [33] 吉田松陰(出版年不明):東北遊日記。尊攘堂。

[受付 平成31年1月7日, 受理 平成31年3月29日]